大手前大学論集　第11号（2010）pp.213－228

ベンガルのバウルの文化人類学的研究(5)

村　瀬　　智

要　旨

本研究は、インド・ベンガル地方の「バウル」とよばれる宗教的芸能集団の民族誌である。

詩人タゴール（Rabindranath Tagore 1861-1941）が、20世紀初頭にバウルの歌の豊潤さを紹介して以来、それまで「奇妙な集団の風変わりな歌」とみなされていたバウルの歌が再評価されるようになった。タゴールの影響により、その後ベンガル人学者によって膨大な数のバウルの歌が採集され、なかには注釈つきの立派な歌集として出版された。また、バウルの歌を分析し、バウルの宗教を考察した専門書もいくつか出版された。もちろんこれらの研究は、バウルについてのわれわれの理解におおいに貢献したのであるが、そこには「人間としてのバウル」を専門的に紹介しようとした民族誌的文献は、事実上、皆無である。本研究は、バウルの民族誌的記述と分析を通じて、カースト制度と表裏の関係にある世捨ての制度を考察し、インド文明の構造的理解を試みようとするものである。

キーワード：カースト、カースト制度、世捨て、マドゥコリ、ベンガル、バウル

目次

Ⅰ．序論
Ⅱ．ベンガルのバウル：民族誌的記述
　1．バウルの道
　2．もうひとつのライフスタイル
　3．マドゥコリの生活
　4．人間関係

5．宗教生活

6．ベンガル社会の近代化とバウル

Ⅲ．考察：世捨ての文明史的意義

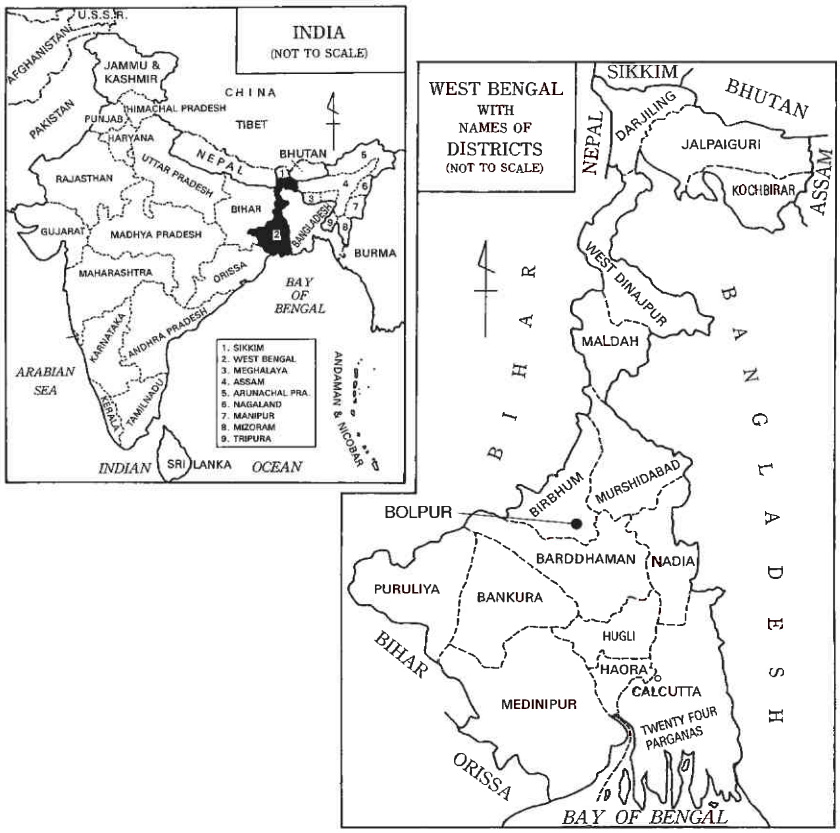
Ⅳ．結論

本稿の前書き

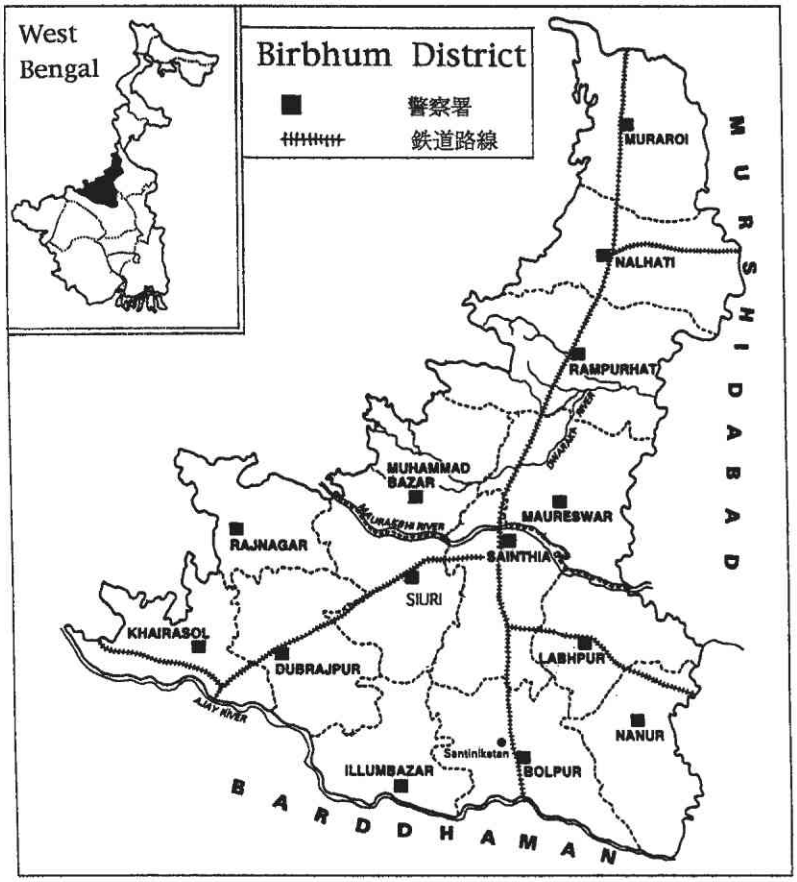
本稿は、『大手前大学社会文化学部論集』第６号、『大手前大学論集』第８号、第９号、および第10号に掲載された拙稿［村瀬　2006: 331-349］［村瀬　2008: 171-188］［村瀬　2009: 253-275］［村瀬　2010: 213-235］のつづきである。本研究「ベンガルのバウルの文化人類学的研究」は、一連の研究であるので、前稿もあわせて読んでいただきたい。

注および参考文献は、本稿に該当する分のみを提示する。

読者の便宜のために、地図は本稿にも提示する。



地図１：インドおよび西ベンガル州
出典：Tourist Map of Bengal



地図２：西ベンガル州ビルブム県

Ⅱ．ベンガルのバウル：民族誌的記述（つづき）

６．ベンガル社会の近代化とバウル

６－１．はじめに

本研究のフィールドワークは、インド・西ベンガル州全域におよぶが、その本拠地はビルブム県ボルプール市に隣接するシャンティニケータンである。ボルプールは、コルカタ（カルカッタ）の北西約160キロ、急行列車で３時間の距離の地方都市である。シャンティニケータンは、詩人タゴールが創設したヴィシュヴァ・バーラティ大学の所在地として有名である。

本稿では、ベンガル社会の近代化、とくに近年のインドの急速な経済成長にともなうボルプール・シャンティニケータン地域の観光現象の変化に対して、バウルがどのように適応しているのかを考察する。

6－2．ベンガルのバウル

本研究の議論の最終部分にはいる前に、研究対象であるバウルについて、簡単にふりかえっておこう。

ベンガルのバウルは、農業労働や工業生産、手工芸作業、商業活動などにいっさい従事していない。彼らは、一般のベンガル人に経済的に依存し、「マドゥコリ」をして生活している。ベンガル語の辞書（*Samsad Bengali-English Dictionary*. Second Edition, 1987）は、マドゥコリという語を、「蜂が花から花へと蜜を集めるように、一軒一軒物乞いをして歩くこと」と説明している。すなわち、バウルとは、「みずからバウルと名のり、バウルの衣装を身にまとい、人家の門口でバウルの歌をうたったり、あるいは神の御名を唱えたりして、米やお金をもらって歩く人たち」のことである。バウルは、世捨て人のようなゲルア色（黄土色）の衣装を着て、「門づけ」や「たく鉢」をして生活費を稼いでいるのである。これは彼らが選んだライフスタイルである。そして、このライフスタイルそのものが、彼らが主張する「バウルの道」（バウル・ポト）の基本なのである。バウルの道とは、「マドゥコリの生活にはじまり、神との合一という究極の目標にいたる道」である。

ベンガル社会の一群の人びとが、バウルの道を選んだ動機のおおくは、カースト社会に内在している特質や矛盾に由来するようである。それらは、慢性的な貧困、低いカースト身分による抑圧、本人の意思のはいりこむ余地のない結婚に対する不安、世代間の反目、父母の別居による家庭崩壊、乳・幼児期における親の死の経験、そして異母兄弟との土地所有権や相続権をめぐる争いなど、解決できない抑圧の具体的な経験である。そして、結果として生じた感情的な緊張や心理的な圧力は、バウルには「現実」であるが「耐えがたい」と感じられていたようである。カーストの地位や身分による限界、インドの家族制度や結婚制度の特性、経済的な不安定さなどに起因するこれらの社会的・心理的な問題に対する解答は、「過酷な現実に耐える」か「耐えがたい現実から自由になる」かの二者択一である。このような状況のなかで、バウルのおおくは、自分の身に降りかかった問題に対する意味ある解決策を、文化的に是認された「バウルの道」、すなわち「マドゥコリの生活」に見いだすことができたのである。彼らは、世捨て人の生活様式を採用することによって、人生の危機を切り抜けることができたのである。マドゥコリの生活は、個人の選択肢が制限されたカースト社会における、選択可能な「もうひとつのライフスタイル」である。

バウルの道は、「サードゥー」（ヒンドゥー教の出家修行者）、「ヨーギー」（ヨーガ行者）、「ボイラギ」（ヴィシュヌ派の出家行者）、「ファッキール」（イスラム神秘主義の行者）など、インド社会にいくつも存在する「世捨ての道」（サンニャーシ・ポト）のひとつである。インド文明には、カースト制度にともなって、それと矛盾する世捨ての制

度が、文明の装置として組み込まれているのである。

6－3．プロの音楽家の出現

詩人タゴールが、20世紀初頭にバウルの歌の豊潤さを世に紹介して以来、それまで「奇妙な集団の風変わりな歌」と思われていたバウルの歌と音楽が、再評価されるようになった。[1] タゴールの影響により、その後ベンガル人学者によって膨大な数のバウルの歌が採集され、なかには注釈つきのりっぱな歌集として出版されるようになったのである。[2]

1951年、タゴールが創設したヴィシュヴァ・バーラティ大学は、国立大学となった。大学はそれ以後、「ポウシュ月の祭典」（ポウシュ・ウトショブ）や「マーグ月の祭典」（マーグ・ウトショブ）を主催するようになった。[3] 大学は、祭典のプログラムのひとつとして、バウルの歌の音楽会を開催するようになったのである。

このようなヴィシュヴァ・バーラティ大学の積極的な後援をきっかけに、1950年代後半には、バウルの歌と音楽は、「ベンガル民俗文化の不可欠の部分」と認識されるようになった。しかしこのことは、ベンガルのバウルの「宗教的求道者」という側面よりも、「民俗音楽家」という側面を強調することになったのである。音楽的技量に卓越したバウルは、ベンガルの上流階級の邸宅での私的な音楽会に招かれたり、大都会での祭典やラジオ・テレビにも出演するようになった。また、バウルの歌や音楽のレコードやカセットテープが商品として販売されるようになった。さらに、外国公演にも招聘されるバウルも出現するようになったのである。

ベンガル社会の急激な変化に呼応するように、一部のバウルは、マドゥコリの生活をやめ、プロの音楽家としての道をあゆみはじめた。彼らは音楽チームを組織し、バウルの歌を音楽会でしか演奏しなくなった。また、音楽教室を開設し、アマチュアの音楽愛好家にバウルの歌や音楽を教えるようになった。彼らは、契約による出演料や授業料によって生活費をかせぐようになったのである。レコードやカセットテープに録音を依頼されたバウルは、バウルの歌や音楽の商業的価値を知った。また外国公演に招聘されたバウルは、外国人の心をもひきつけるバウルの歌や音楽の魅力に気づいた。さらに、野心のあるバウルは、プロの音楽家としての活動の機会のおおいコルカタに移住したので

1）バウルを紹介したタゴールの著作については、［Thâkur 1905, Tagore 1922, 1931］を参照。また、19世紀後半のベンガル社会におけるバウルに関する記述については、［Datto 1870-71（ベンガル暦1277）：168］［Bhattacharya, J.N. 1995（1896）：381-382］を参照。

2）バウルの歌の代表的な歌集については、［Mansur-Uddin 1942］［Bhattacarya, U. 1958, 1981］［Das and Mahapatra 1958］を参照。また、英訳歌集については［Bhattacharya, D. 1969］を参照。

3）ベンガル暦のポウシュ月（12月中旬～１月中旬）とマーグ月（１月中旬～２月中旬）は、季節としては冬であるが、一年でもっとも気候のおだやかな時期である。

ある。

ほとんどのバウルは、今日でもベンガルのいなかの村々をまわり、人家の門口で歌をうたったり、神の御名を唱えたりしながら、一軒一軒マドゥコリをして生活している。しかし彼らは、コルカタに移住し、自宅には電気や水道はもちろんのこと、冷房装置や温水装置も完備し、テレビや電話、運転手つきの自家用車まで所有するプールノ・チャンドロ・ダシュのような、プロの音楽家として成功した「スター」の生活も知っている[4]。今日の若いバウルが、バウルの歌を一握りの米と交換するために「門口」でうたうよりも、気前のよい祝儀が期待できる「舞台」でうたいたがるとしても、それは当然である。そして彼らの関心が、宗教や儀礼に精通したバウルになることよりも、歌手として人気のあるバウルになることだとしても、それは不思議なことではない。

6－4．シャンティニケータンの観光地化

1961年、タゴールの生誕百年祭が、ヴィシュヴァ・バーラティ大学を中心に、ボルプール・シャンティニケータン地域で盛大に行なわれた。それを記念して、タゴールが晩年を過ごした大学構内の邸宅（ウッタラヤン）が一般公開されるようになった。また、邸宅に保管されていた直筆の原稿、自身が描いたデッサンや絵画、書簡、邸宅を訪問した客人との記念写真、受けとった贈り物など、すべての遺品を展示するための博物館が、ウッタラヤンの敷地内に開設された。さらに、大学から程近い場所に、西ベンガル州政府直営の「シャンティニケータン・ツーリスト・ロッジ」が開設された。それは、この地域で最初の一般観光客用の本格的な宿泊施設である。「タゴールのシャンティニケータン」は、重要な観光資源だと考えられたのである。

シャンティニケータンの観光地化にともなって、ヴィシュヴァ・バーラティ大学周辺に、民間経営のロッジや土産物店がつぎつぎと開店した。大学主催の「ポウシュ月の祭典」や「マーグ月の祭典」が開催中でなくても、インド人観光客でにぎわうようになったからである。

「シャンティニケータン」という地名は、「平和の郷」という意味で、そのひびきのよい名前は、インド人だけでなく、外国人にもアピールしたようである。1960年代後半から、ヴィシュヴァ・バーラティ大学に外国人留学生が増えてきた。また、自由な旅行を楽しむ外国人バックパッカーも増えてきた。アメリカやヨーロッパ、オーストラリアで、英語版の「地球の歩き方」のようなガイドブックが、つぎつぎと出版された。欧米

4）Purna Chandra Das（1935-　）。プールノは、プロの音楽家として成功した最初のバウルである。1954年、彼は「アカシバニ」（インド国営放送のベンガル語名）に出演し、その傑出した歌唱力で一躍有名になった。彼はその後、インド国内だけでなく海外にも活動の場を広げ、ソ連（当時）、アメリカ、ヨーロッパ、日本など世界各地で公演を行っている。

や日本などの先進的産業社会では、体験型の海外旅行ブームがおこったのである。

インドは訪問国として若者に人気があった。それには、ビートルズのジョージ・ハリスンがインドのシタール奏者ラヴィ・シャンカールに弟子入りしたことや、シンガーソングライターのボブ・ディランがプールノ・チャンドロ・ダシュ（バウル）とアメリカ各地で共演し大成功をおさめたことなどが、大きく報道されたことも影響を与えたのかもしれない。

6－5．マドゥコリのパターンの変化（その1）

バウルは、人家の門口でバウルの歌をうたったり、あるいは神の御名を唱えて、マドゥコリをして生活費を稼いでいる。それは、ベンガルの町や村の、「ベンガル人の家の門口」でのことであった。しかしバウルは、1970年頃から、ヴィシュヴァ・バーラティ大学のホステル（寄宿舎）に住む外国人留学生や、ツーリスト・ロッジに滞在する外国人旅行者も訪問するようになったのである。彼らは、外国人にバウルの歌をうたって、金銭を要求するようになったのである。[5)]

さらにバウルは、やはり1970年頃から、人家の門口でマドゥコリをするだけなく、列車の中でも歌をうたって稼ぐようになった。乗客には、バウルの歌を求めるインド人観光客や外国人旅行者も少なからずいたからである。

列車のなかで歌をうたって稼ぐことの最大の利点は、天候に左右されず、きびしい夏期や雨期にも容易に行えることである。ベンガルの夏には、「ルー」とよばれる熱風が何日もつづく。手に触れるものは、すべて熱く感じられる。雨期になれば、すこしは涼しくなる。しかし雨期には、ときには川があふれ、道が流される。夏期や雨期は、村にマドゥコリに行くのが困難な時期なのである。

しかし、この利点にもかかわらず、バウルのおおくは、列車のなかで歌をうたって稼ぐよりも、村でのマドゥコリを好むようである。その理由のひとつは、列車のなかは、いつもざわざわした雰囲気にあるからだ。バウルが歌をうたっていても、さまざまな物売りが大声をはりあげて、混んだ車内をとおりすぎてゆく。そこは、演奏者のバウルにとっても、聴衆の乗客にとっても、十分な環境とはいいがたい。

もうひとつの理由は、そこでは、バウルが不特定多数の正体不明の乗客を相手に歌をうたわなければならないことにある。このことは、ボルプール駅裏手のＳ地区に住むBiswanath Das Baulの証言によくあらわれている。

「おおぜいの乗客のなかには喜捨をしたくない人もいるでしょう。それでもその人は人目を気にして、20パイサか25パイサの小銭を与えるでしょう。しかし、わたしがどこ

5）1972-74年に、ヴィシュヴァ・バーラティ大学に留学したタケウチ・ワクは、バウルの突然の訪問を受けたときの印象を報告している［Takeuchi 1976: 28-36］。

かの村のだれかの家の中庭でうたっている姿を想像してごらんなさい。そこには数人の聴衆しかいないけれど、彼らはわたしの歌をじっと聴いてくれる。そして、わたしの歌に満足した村びとは、一握りの米をよろこんで与えてくれます。それは、列車のなかの不本意な小銭よりもはるかにうれしい」[6]。

バウルは、列車の無賃乗車を黙認されている。しかし、無賃乗車を黙認されているのはバウルだけではない。乞食や物売り、そして世捨て人も無賃乗車を黙認されているのである。

村でマドゥコリをするバウルは、経文を唱えて物乞いをするボイラギ（ヴィシュヌ派の出家修行者）やファッキール（イスラム神秘主義の行者）などと同様に、世捨て人の範ちゅうの人間である。しかし、列車のなかで歌をうたって稼ぐバウルを、一般の乗客はどのようにみているのだろうか。バウルは小銭を求める乞食なのか。それとも、歌の押し売りをする物売りなのか。

６－６．インドの経済危機と経済政策の転換

1990年８月のイラクのクウェート侵攻がきっかけとなり、91年１月に湾岸戦争が始まった。この影響で原油価格が高騰し、また、中東に出稼ぎに出ていたインド人労働者からの送金が止まった。この結果、インドは外貨準備が輸入の約２週間分にまで減少するという深刻な国際収支危機に陥った。

社会主義経済により国内産業の保護を優先してきたインド政府は、1991年から経済自由化路線へ変更する経済改革を開始した。具体的には、国内における産業規制の緩和や、貿易・諸外国からの投資の自由化を進展させ、高い経済成長の実現を目ざす政策である。

1991年以降の経済改革が功を奏し、1992年以降のインドの国内総生産（GDP）は順調に伸展している。1993年から2003年のインドの平均GDP成長率は5.9%であるが、同じ時期の日本の成長率は1.2%であるので、インドが着実に経済成長を続けているのがわかる。次の「表１」は、インドの所得別世帯構成の推移を示したものである。

	1985	1989	1992	1995	1998	2001
低所得層（～45,000ルピー）	65.3	58.9	58.2	48.9	39.8	34.6
下位中所得層（45,001～90,000ルピー）	25.2	26.9	25.4	30.7	34.5	37.3
中所得層（90,001～135,000ルピー）	6.9	10.1	10.4	11.9	13.9	13.9
上位中所得層（135,001～180,000ルピー）	1.5	2.7	3.7	5.0	6.2	6.8
高所得層（180,001ルピー～）	1.1	1.4	2.3	3.5	5.7	7.3

表１　インドの所得別世帯構成の推移（単位：％）
出典　NCAER（インド国立応用経済研究所）

6）Biswanath Das Baul のインタビュー。（1988年７月７日）

「表１」をみると、経済成長にともない年間の世帯収入が４万5000ルピー以下の低所得層が減り、年間の世帯収入が９万ルピー以上の中所得層以上の占める割合が、1985年度の9.5%から2001年度には28%まで拡大している。「表１」にはないが、中所得層以上の割合は、2005年度ではさらに34.5%にまで拡大しており、いわゆる中間層が増大していることがわかる。インドというと、物乞いをする子どもの姿がテレビ映像で流されることが多いため、「貧困」というイメージが強かったが、人びとの生活は着実に豊かになっているのである。事実、自動車や二輪車、家電製品などの購入も増えているし、携帯電話、パソコン、インターネットの利用も急速に伸びている。

６－７．別荘とリゾートホテルの建設ラッシュ

1988年当時、シャンティニケータンの北１キロ、プランティック駅の西側は、広々とした野原だった。ところが、1990年代後半になると、野原は宅地造成され、コルカタ在住の富裕層の別荘がつぎつぎと建てられた。いずれも豪邸である。また、大資本の開発による分譲邸宅もつぎつぎと売りだされた。たとえば、2005年に第１期工事がはじまり、2007年に第２期工事が完了した180棟からなる「ショナル・タリー」(「黄金の船」の意)の守衛によると、家主はコルカタ、デリー、ムンバイなどの大都市の富裕層で、なかには映画スターも入居しているという。ただし、家主はこれらの邸宅を別荘として使用しており、常時住んでいるわけではない。しかし、邸宅の管理や手入れをする使用人やメイドが住む別棟の小屋があり、常駐している。

また、1990年代後半になると、シャンティニケータン地域には、高級リゾートホテルがつぎつぎと建てられた。その数は20をこえる。１泊3000～4500ルピーの超高級ホテルから、一泊2000～3000ルピーの高級ホテルまで、種類はさまざまである。これらのリゾートホテルは、1960年代から80年代に建てられた、１泊200ルピー前後の、宿泊だけのツーリスト・ロッジとは性格が異なる。休日をシャンティニケータンの別荘や高級リゾートホテルですごす新興富裕層が増えているのである。観光地シャンティニケータンが高級化しているのである。

６－８．急速な物価の上昇

急速な経済成長は、物価の上昇をともなう。次の「表２」は、1988年と2007年の物価や流通貨幣を比較したものである。

関西空港からコルカタ行きの飛行機は、どの航空会社も深夜着である。ホテルの予約をする習慣のないわたしは、空港からプリペイド・タクシーを利用して、市内の安ホテル街サダル・ストリートに直行するのが常である。空港のプリペイド・タクシーなので、法外な運賃を請求されることはないのであるが、それでも運賃は毎年確実に上がってい

	1988	2007
コルカタ（空港−市内）の prepaid-taxi の運賃	Rs. 60. 00	Rs. 250. 00
鉄道運賃 (Howrah–Bolpur, 159 km, Express, 2nd Class)	Rs. 18. 00	Rs. 48. 00 (2002 年改定)
米１キロの値段	Rs. 4. 00	Rs. 22. 00
流通紙幣の種類	1, 2, 5, 10, 20, 50, 100 (Rupee)	10, 20, 50, 100, 500, 1000 (Rupee)
流通硬貨の種類	5, 10, 20, 25, 50 (paisa) 1 (Rupee)	50 (paisa) 1, 2, 5 (Rupee)

表２　インドの物価と流通貨幣の比較

るのを実感する。約１時間でサダル・ストリートに着く。途中、運転手との雑談のなかで、米１キロの値段を聞くことにしているが、1988年には４ルピーだったのが、2007年には22ルピーということだった。米の値段を市場で確認しているので、運転手の言うことは、毎年ほぼ間違いない。それにしても、米の１キロの値段が、20年間で５倍以上にもはね上がっているのである。1991年の経済改革以降、人びとの生活は着実に豊かになったといわれている。しかし、「表１」の年間の世帯収入が４万5000ルピー以下の低所得層というのは、１日の収入が１ドル未満の「絶対的貧困層」に当たる人びとで、2001年には、まだ全人口の34.6%にも及んでいる。急速な物価の上昇は、貧困層を直撃しているのである

６－９．マドゥコリのパターンの変化（その２）

バウルは、1970年頃から村でマドゥコリをするだけでなく、列車のなかでも歌をうたって稼ぐようになった。しかし、1990年代の中頃から、列車で稼ぐバウルがめっきり少なくなった。そして2002年から、車内で稼ぐバウルをまったく見かけなくなった。

バウルが村でマドゥコリをする場合、喜捨として受けとるのは、米や季節の野菜などの「現物」である。それに対し、列車内でうたって稼ぐバウルが受けとるのは、もっぱら「現金」である。

1980年代まで、インドのローカル列車に乗ると、ポケットには20パイサや25パイサの小銭がいくつも必要だった。つぎつぎと来るバウルや乞食、床を清掃する少年などに与えるために必要だったのである。ところが、1990年代中頃から、流通する紙幣や硬貨が高額になってきた。1988年には流通していた５パイサ、10パイサ、20パイサ、25パイサの硬貨がなくなった。50パイサ硬貨はまだ流通しているが、市場ではほとんど見かけなくなった。物の値段の最低額は、現在では１ルピーである。しかし、乗客はバウルや乞

食に「１ルピー硬貨」を与えるのはためらうようである。人びとは、まだ、かつての「１ルピーの価値」を記憶しているのである。結果として、バウルや乞食を無視する乗客が増えた。この傾向は、もっぱら列車で歌をうたって稼いでいたバウルには打撃であろう。

バウルや物売りは、列車の無賃乗車を黙認されていた。しかし2002年から、車内の物売りには営業許可証が必要となった。そして、車内で歌をうたって稼ぐバウルの無賃乗車も黙認されなくなった。車内で歌をうたって稼ぐことは、「営業行為」とみなされるようになったのである。バウルは、インド人観光客や外国人旅行者の利用する昼間の急行列車には乗らなくなった。列車で稼ぐのは、割に合わない仕事になったのである。結果として、バウルは村でマドゥコリをする回数が増えた。

村へマドゥコリに行くために列車を利用するバウルは、乞食や世捨て人と同様に、あいかわらず無賃乗車を黙認されている。バウルが利用するのは早朝の普通列車である。検札官は、「チケットはもっているか」と、一応は問い聞く。しかし、バウルが「マドゥコリをして食べているので、チケットを買うことができない」というと、黙認してくれるという。

６－10．GDBの経済活動（1988年）

シャンティニケータンのSP地区に住む Gopal Das Baul（以下、GDB）は、自分のことを「10ルピー・バウル」とよんでいた。GDBが自分のことを「10ルピー・バウル」とよぶように、彼の稼ぎは、その日によって変動はあるものの、おおよそ１日に10ルピーであった。

次の「表３」は、1988年１月１日から12月31日までの、一年間の彼の稼ぎをまとめたものである。喜捨として受けとったコメや季節の野菜などの現物は、市場価格に換算しルピーで表示した。また、マドゥコリをした日の夕方に、歌を要請された日などは、両

方　　法	日　数	収入（ルピー）
村や町でのマドゥコリ	125	1445.80
列車でうたって稼ぐ	64	615.70
村や町でのマドゥコリと列車での稼ぎ	13	215.00
祭りやメラへの参加	16	72.00
演奏会への参加	10	60.00
要請によりうたう	8	539.00
その他	25	280.00
休日	117	0
合　　計	378	3227.50

表３　GDBの経済活動（1988年）

方を１日と計算した。なお、この「表３」は、本研究の「民族誌的記述３、マドゥコリの生活」の議論の根拠となった資料である［村瀬　2009：255-268］。後の議論との比較のために再掲する。

GDBは、数年前から列車で歌をうたって稼いでいない。しかし彼は、現在でも週に３日は村にマドゥコリに出かけるという。そして、彼が村で１日マドゥコリをすると、米２～３キロ、季節の野菜１～２キロを集めることができるという。それは20年前と変化していない。

６－11．観光客相手の音楽チーム

1950年代から60年代にかけて、いち早くプロの音楽家の道を歩むようになったのは、音楽的技量に卓越した一部のバウルにかぎられていた。しかし、1990年代の中頃から、ボルプール・シャンティニケータン地域に住む「ごくふつうのバウル」も、気の合った仲間と音楽チームを編成するようになった。シャンティニケータン地域につぎつぎとできた新富裕層の別荘やリゾートホテルから、演奏を依頼されることが増えたからである。バウルは、村にマドゥコリに出かけるときは単独行動であるが、演奏の依頼を受けると音楽チームを組むのである。

シャンティニケータンのSP地区のGDBも、そのような音楽チームに所属している。音楽チームは５人編成で、リーダーは、1990年代にSP地区に移住してきた Basudev Das Baul（以下、BDB）である。メンバーは、BDBとGDBのほかに、タブラ（太鼓）奏者、バーンシ（竹の横笛）奏者、そしてハルモニウム（箱形の手押しオルガン）奏者である。このうちバウルは、BDBとGDBで、楽器演奏だけでなくボーカルも担当する。あとの３名は音楽愛好者で、ほかに職をもっている。しかし、演奏依頼があると、全員がバウルの衣装を着用して出かける。観光客相手の音楽チームには、しばしば「バウルもどき」が紛れ込んでいるのである。

BDBとGDBは、詩人タゴールで有名なシャンティニケータンを訪れた外国人観光客や、遠来の客をもてなす金持ちのベンガル人に請われて、ときどきバウルの歌をうたうことがあった。また、ほかの音楽チームのパートタイムのメンバーとして、別荘やリゾートホテルで演奏することもあった。しかし彼らは、2000年頃から、別荘の管理人やリゾートホテルのマネージャーから、「自分の音楽チームをもっていますか」とか、「全部込みで演奏料はいくらですか」とかの問い合わせを受けるようになったのである。たぶんBDBとGDBの人柄が好印象を与えたのだろう。こうして、BDBの提案で、聴衆のリクエストに柔軟に対応できるように、タブラ、バーンシ、ハルモニウムの奏者を加えて、観光客相手の５人編成の音楽チームが誕生したのである。彼らは、観光客相手の演奏のことを「プログラム」とよんでいる。

リーダーのBDBは、自宅に看板を掲げ、名刺をつくり、シャンティニケータンのリゾートホテルのマネージャーや別荘の管理人に挨拶回りをした。2005年には携帯電話にも加入した。彼の営業活動は功を奏し、演奏依頼も徐々に増えているという。

BDBの音楽チームは、繁忙期の休日には１日に数カ所からの演奏依頼を受けることもあるが、閑散期には月に２～３回のこともあるという。それでも平均すると、週に１～２度の演奏依頼を受けるという。BDBの５人編成の音楽チームの出演料は、２時間の演奏で平均1000ルピーである。出演料は各メンバーに平等に分配される。しかし、リーダーのBDBには、依頼者から100～300ルピーの祝儀が、別途に渡されることがある。また個々のメンバーにも、演奏を気にいった聴衆から20～50ルピーの祝儀が渡されることがある。それらの祝儀は、受けとった者のものになることは、メンバー全員の了解事項である。

６－12．GDBの経済活動（2007年、概算）

さて、バウルの2007年の稼ぎを、シャンティニケータンのGDBを例に概算してみよう。

GDBは、現在でも週に３日は村にマドゥコリに出かける。これを概算すると、彼は年間に165日マドゥコリに出かけたことになる。彼が村で１日マドゥコリをすると、村人からの喜捨として、米２～３キロと、季節の野菜１～２キロを受けとるという。2007年の市場価格では、米１キロの値段は22ルピー、季節の野菜１キロの値段は、平均すると、おおよそ米の半額である。GDBの１日のマドゥコリで得た喜捨を、市場価格に換算して概算すると、71ルピー50パイサ（Rs.71.50.－）ということになる。つまり彼は、マドゥコリで年間１万1797ルピー50パイサ（Rs.11,797.50.－）稼いだことになる。

GDBは、週に１～２回、プログラムに出演するという。これを概算すると、彼は年間83回のプログラムに出演したことになる。彼は１回のプログラムで、平均すると200ルピーの出演料を受けとる。したがって、年間のプログラムの出演料として、１万6600ルピー（Rs.16,600.00.－）稼いだことになる。

バウルは、数年前から列車のなかで歌をうたって稼がなくなった。その理由は、すでに述べたように、列車で稼ぐのは、割に合わない仕事になったからある。さらにバウルは、メラや祭に参加しなくなった。それは、ベンガルで主要なメラや祭が行われるのは、秋の米の収穫がおわり、もっとも気候のおだやかな霜期と冬に集中しているからである。その時期は観光シーズンで、観光地となったシャンティニケータン地域の繁忙期である。したがって観光客相手の音楽チームを編成しているバウルには、割りに合う仕事が殺到する時期でもあるからである。

GDBが、村にマドゥコリに出かけなかった日や、プログラムに出演しなかった日を

休日とみなすと、それは年間117日となる。週休２日のペースは、20年前と変化していない。

GDBのマドゥコリとプログラムによる稼ぎは、不確定要素のおおい祝儀を除いて概算すると年間２万8397ルピー50パイサ（Rs.28,397.50.－）となる。これらの概算をまとめると、つぎの「表４」のようになる。「表４」は、「表３」のように、日々の稼ぎを集計した厳密なものではない。あくまでも概算である。

方　　法	日　数	収入（ルピー）
村でのマドゥコリ	165	11,797.50
プログラムに出演	83	16,600.00
列車でうたって稼ぐ	0	0
メラや祭への参加	0	0
休日	117	0
合　　計	365	28,397.50

表４　GDBの経済活動（2007年、概算）

６－13．バウルの適応戦略

今までの議論を整理しながら、「表３」と「表４」を比較すると、インド社会の急速な経済成長にともなうシャンティニケータン地域の観光現象に対する、バウルの適応戦略がうかびあがってくる。

まず気づくのは、バウルにとって、マドゥコリで生活することの重要性である。マドゥコリの生活は、ひとりの人間が「バウルになる」ためにも、また「バウルである」ためにも不可欠の要件である。これは彼らが選んだライフスタイルである。

バウルが村人から喜捨として受けとるのは、米や季節の野菜などの「現物」である。「現物の価値」は、インド社会の急速な経済成長にともなう物価の上昇に影響されない。バウルは、村でマドゥコリをするかぎり、生活の基盤は脅かされないのである。

「表３」と「表４」をみると、GDBの2007年の稼ぎ（Rs.28,397.50.－）が、1988年の稼ぎ（Rs.3,227.50.－）に比べ、8.8倍になったことがわかる。この期間の米１キロの値段が、1988年の４ルピーから2007年の22ルピーへと5.5倍の上昇なので、彼の稼ぎは物価の上昇を上回っている。これは、別荘やリゾートホテルで観光客相手のプログラムという、割りに合う仕事が増えたからである。

観光客が求めているのは、シャンティニケータンの別荘やリゾートホテルで、バウルの歌や音楽を聴いたり、バウルの演奏で踊ったりして、家族や友人と楽しむことである。バウルもそのことを十分に承知している。バウルは、観光客相手の音楽チームを組織するときに、聴衆のリクエストに柔軟に対応できるように、バウルではないタブラ奏者や

バーンシ奏者、ハルモニウム奏者を加えた。また演奏依頼があると、メンバー全員がバウルの衣装を着て出かけるようにした。

バウルは、マドゥコリの生活という「バウルの道」の基本を守りながら、インド社会の急速な経済成長にともなうシャンティニケータン地域の観光現象に対して、音楽チームを組織するという方法で適応しているのである。

6－14．おわりに

バウルは、マドゥコリの生活を採用し、「バウルになる」ことによって、人生の危機を乗りきることができた。マドゥコリの生活は、個人の選択肢が制限されたカースト社会における、選択可能な「もうひとつのライフスタイル」である。

1951年、タゴールが創設したヴィシュヴァ・バーラティ大学は、国立大学となり、「ポウシュ月の祭典」や「マーグ月の祭典」を主催するようになった。大学は、祭典のプログラムのひとつとして、バウルの歌の音楽会を開催するようになった。このようなヴィシュヴァ・バーラティ大学の積極的な後援をきっかけに、1950年代後半には、バウルの歌と音楽は、「ベンガル民俗文化の不可欠の部分」と認識されるようになった。ベンガル社会の変化に呼応するように、音楽的技量に卓越した一部のバウルは、マドゥコリの生活をやめ、プロの音楽家としての道をあゆみはじめた。

1961年、タゴールの生誕百年祭が、ヴィシュヴァ・バーラティ大学を中心に、ボルプール・シャンティニケータン地域で盛大に行なわれた。それを記念して、タゴールが晩年を過ごした大学構内の邸宅（ウッタラヤン）が一般公開されるようになった。また、邸宅に保管されていたすべての遺品を展示するための博物館が、ウッタラヤンの敷地内に開設された。さらに、大学から程近い場所に、西ベンガル州政府直営の一般観光客用の本格的な宿泊施設が開設された。シャンティニケータンの観光地化にともなって、ヴィシュヴァ・バーラティ大学周辺に、民間経営のロッジや土産物店がつぎつぎと開店した。

1960年代後半から、ヴィシュヴァ・バーラティ大学に外国人留学生が増えてきた。また、自由な旅行を楽しむ外国人バックパッカーも増えてきた。この現象に呼応して、1970年頃から、バウルのマドゥコリのパターンが変化してきた。彼らは、ベンガル農村の人家の門口でマドゥコリをするだけでなく、大学のホステルに住む外国人留学生や、ツーリスト・ロッジに滞在する外国人旅行者も訪問するようになったのである。さらにバウルは、やはり1970年頃から、人家の門口でマドゥコリをするだけなく、列車の中でも歌をうたって稼ぐようになった。乗客には、バウルの歌を求めるインド人観光客や外国人旅行者も少なからずいたからである。

1950年代から60年代にかけて、いち早くプロの音楽家の道を歩むようになったのは、

音楽的技量に卓越した一部のバウルにかぎられていた。しかし、1990年代の中頃から、ボルプール・シャンティニケータン地域に住む「ごくふつうのバウル」も、気の合った仲間と音楽チームを編成するようになった。シャンティニケータン地域につぎつぎとできた新富裕層の別荘やリゾートホテルから、演奏を依頼されることが増えたからである。バウルは、村にマドゥコリに出かけるときは単独行動であるが、演奏の依頼を受けると音楽チームを組むのである。そして、バウルではないメンバーも、バウルの衣装を着て出かけるのである。

バウルは、インド社会の急速な経済成長にともなうシャンティニケータン地域の観光現象に対して、音楽チームを組織するという方法で適応しているのである。しかし、バウルは、マドゥコリの生活をつづけ、「バウルの道」の基本を守っている。バウルにとって、マドゥコリで生活することの重要性は変化していないのである。

参考文献

Bhattacarya, Jogendra Nath
1995　*Hindu Castes and Sects*. Reprint of 1896 edition. Calcutta: Firma K.L.M.
Bhattacarya, Upendranath
1958　*Bânglâr Bâul o Bâul Gân*. Calcutta: Orient Book Company.
1981　*Bânglâr Bâul o Bâul Gân* (new edition).（『ベンガルのバウルとバウルの歌』）Calcutta: Orient Book Company.
Das, Matilal and Piyushkanti Mahapatra（eds.）
1958　*Lâlan Gîtikâ*.（『ラロン・ファッキールの詩歌』）Calcutta: University of Calcutta.
Dasgupta, Birendramohan（Ed.）
1987　*Samsad Bengali-English Dictionary*. Second Edition. Calcutta: Sahitiya Samsad.
Datto, Aksay Kumar
1870-71（1277）*Bhârotîyo Upâsok-samprodaye*.（『インドの熱狂的な宗派』）Calcutta.
Mansur-Uddin, Muhammad（ed.）
1942　*Hârâmanî*.（『失われた宝石』）Calcutta: University of Calcutta.
村瀬　智
2006　「ベンガルのバウルの文化人類学的研究（1）」『大手前大学社会文化学部論集』第 6 号、331-349頁。
2008　「ベンガルのバウルの文化人類学的研究（2）」『大手前大学論集』第 8 号、171-188頁。
2009　「ベンガルのバウルの文化人類学的研究（3）」『大手前大学論集』第 9 号、253-275頁。
2010　「ベンガルのバウルの文化人類学的研究（4）」『大手前大学論集』第10号、213-235頁。
Tagore, Rabindranath
1922　*Creative Unity*. London: Macmillan.
1931　*The Religion of Man*. New York: Macmillan.
Takeuchi Waku
1976　“Affected by the Wind: Meeting with the Bauls.” *The Kyoto Review*. No. 8, pp.28-36.
Thâkur, Robîndronâth
1905　*Bâul*.（『バウル』）Calcutta.